406号（昭和43年12月10日第3種郵便物認可）　2005年10月1日　（毎月1回1日発行）

総動員伝道

総動員伝道の目標
1. すべての人に福音を伝えよう。
2. すべてのクリスチャンがよいあかし人になろう。
3. すべての教会が成長しよう。

みな一つとなって総動員伝道に全力を注ぐ

総動員伝道　委員　鈴木留蔵

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります」。

（マタイ六・33～34）

21世紀を迎えて既に5年が過ぎようとしています。また、主の再臨も祈りの内に近いことが知らされているこの時、クリスチャンとして主から選ばれた私たちは、今何をしなければならないのでしょうか。

申すまでもなく、日本の総動員伝道の業に励まなければならないと思います。主の再臨、だから神の国とその義とを第一に求めること、また聖書の約束にしたがって祈ること、こうしてイスラエルはみな救われるということです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う」（ローマ十一・26）。主の再臨と、エルサレムの救いのために祈ること、また日本民族の救いのために祈ること、三大祷告と言われております。この祈りをもって、日本の総動員伝道の業に励む時に必要も与えられ、絶対に困ることはありません。

日本は戦後自由にイエス・キリストを誰にも伝道出来るようになってから既に60年になります。それにもかかわらず、今だもって人口の1％しかクリスチャンになっていないと言われております。先に主の恵みによって救われた私たちには責任があります。1％のクリスチャンしかいないと言うことは、あとの99％の人々が滅びの道に迷っていると言うことです。私どもクリスチャンがどうあるべきか責任があると思います。

「神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい」。

（二テモテ四・1～2）

時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。これは自分の都合でなく、祈って神の導きがある時はどんなに多忙の時でも主の奉仕を優先して従う態度です。その時に神の業を拝する事が出来ます。

日本において数多くの宣教団体があります。この団体だけでなく、各教会も教団も、みな一つとなって総動員伝道に全力を注いで、主の業に励み、日本にリバイバルが起こされるようにと祈るものであります。

伝道メモ 55

アルコールとの闘い

私の牧している教会では、毎週金曜日の夜、アル中の人々に部屋を開放している。集まる人の数は週によって異なるが、平均して10人ぐらいのようである。

彼らはアル中から立ち直りたいと願っている人々で、民族、職業、宗教を問わずに集まっている。だから特にキリスト教を押し付けることは出来ない。でも教会が受け入れてくれた、と言うだけでも意味があると思って、教会の部屋を使っていただいている。

毎週、およそ2時間ぐらい、本を読み合って、感想を述べているようである。一人ひとりが感想を述べ、助言をし、励まし合っている。

若い女性もいる。一見してアル中だなと思う人もいれば、まったく分からない人もいる。

先日、台湾で宣教師として奉仕している木下理恵子さんから報告を受け取った。その中に次のようなことが記されていた。「金曜の夜の集会は特にアルコール依存症の人たちを対象とした内容です。スモール・グループに分かれて感想などを話し合い、一緒に祈りあったりします。やっと仕事を始めた人が何週間か後、またお酒を飲み始め、仕事を失くすケースも度々出てきます。そうした人達の中に、もう一度やり直そうとする人もいます。依存症との闘いは峻烈なものです。でも神様には変える事が出来ます。お祈りください」。

どこの国にも同様な人はいる。お酒で人生を狂わせた人は何と多くいることだろう。死に物狂いでお酒を絶とうとしている。やっと信仰に導かれ、勝利だと思っていたのだが、礼拝での聖餐式でぶどう酒を一口口にしたことで、一気に元に戻ってしまった人がいると聞いた。それほど魔力のあるのがアルコールだ。恐ろしいのだ。危険なのだ。

欧米の宣教師たちによって、クリスチャンはお酒を飲まないのだと言うよい習慣を日本の教会に教えてくれた。北海道で有名なクラーク博士も徹底してお酒には手をつけなかったと言う。

お酒で悩んでいる人が大勢いることを覚えて、クリスチャンはよい模範で証しをしたいと思う。

教会を建て上げる喜び 33

（信徒のためのセミナー）

小助川　次雄

第七課『教会形成』の実践プログラムの例（その4）

二、教会の現状の受容と前進

ここ数回にわたり、教会の現状分析とその結果の取り扱い方について少しだけですが学びました。大切なことは、これからどうするかということです。もちろん、部分的には、これまでの学びの中で、そのつど触れたこともあります。今、学びの一応の結びの時期に入りましたので、ここに、それらのことを要約しておきたいと思います。

1．「ないものねだり」はやめましょう。今ある事やものを最大限活用しましょう。

2．今より一歩進んだ積極的、肯定的な考えで教会生活を励みましょう。世の格言でさえも、「成せばなる、成さねばならぬ何事も、成らぬは人のなさぬなりけり」と言っているのです。また、「現状維持は退歩を意味する」と言った人もいます。

聖書の中には、旧約・新約を問わず、多くの箇所で、「神にある可能性」と、その大きいことが語られているのではありませんか。

詩篇四十・5、エレミヤ三三・3、イザヤ五二・2～4、ヤコブ一・5～7ほか。

3．将来の教会ビジョン（像）を持ち、その実現のために祈り、具体的な計画を立てることです。「幻の無い民は滅びる」（箴言二九・18）、「相談して計画を整え、すぐれた指揮のもとに戦いを交えよ」（箴言二十・18）ほか。

4．このとき、①教会の質的成長の目標と達成のための方策、②教会の機能的成長の目標と達成のための方策、③数量的成長の目標と達成のための方策等を考え、話し合い、一応決めます。

このとき、いつも覚えて置くべき大切なことは、聖書のみことばによって判断するということです。みことばの裏づけのないことはしないようにしましょう。それから、極論に走らないことです。これは続きませんし、多くの参加を得ることを難しくします。また、調和ある考えや活動を心がけることです。一時的に、あるいは段階的に片寄ることは避けられません。しかし、少し広く見る時、調和が見えることが大切です。

◆ウィリアム・カーレーと日本伝道

私はアメリカから来られた宣教師、ディビット・クバとその奥さんエドナによって救いの恵みに導かれました。献身的な彼らの生活と奉仕に強く心を動かされました。いくつもの大学で「英語聖書研究会」を持っておられ、毎週土曜日には自宅に学生を招き、英語聖書研究会と夜は日本語聖書研究会をご近所の方々のために開いていました。英語の会合と日本語の会合の間に夕食の時がありました。全部無料でした。地方から出てきていた私にとっては外国人の家に行けるということ、ただで英語を学び、夕食もいただけるというので良く通いました。

日本人は黒っぽい衣服を着ているというので、ハワイ出身の彼らでしたが、特に奥さんは色物の多い衣服を黒に染め直したと聞きました。

日本の宣教と文化には多くの宣教師の影響があると思います。建物の形式、学校、病院、食物（ピーナッツ・バターやジャムなど）、もちろん宣教の働きを通して多くの偉大な日本人が輩出しています。

現在も約２２００人もの宣教師が宣教活動をしています。物価の高い日本ですから、日本に1家族を派遣するお金で他の国は3家族ぐらい派遣できると言うので、最近は日本に派遣しなくなっており、宣教師の数が減っていると聞いていますが、それでもこれだけの宣教師が日本で活動してくださっているのは感謝なことです。

「近世海外宣教の父」と言われているのはウィリアム・カーレーです。彼は１７６１年8月17日にイギリス・ノーサンプトンの貧しい家庭に誕生しました。16歳から28歳まで靴職人をしていました。両親は熱心な英国国教会の信徒だったそうで、その影響を受けて彼も信仰に導かれました。長じてからバプテストの信仰に共鳴し、ノーサンプトン・バプテスト教会の会員となり、信徒伝道者として奉仕していました。１７８６年にはモウルトン・バプテスト教会の牧師に就任しました。彼が25歳の時でした。

彼には言語習得の特別な才能が与えられていたようで、英語はもちろんですが、ラテン語、ヘブル語、ギリシャ語、さらにドイツ語、オランダ語、フランス語、後にはインドへの宣教師としてベンガル語を習得しています。このような非凡な才能は神によって宣教師になるよう導かれる素養となっていたのでしょう。

１７９２年5月、バプテスト派の年会がノッティンガムで開催されました。彼はその年会で説教するのですが、かの有名な訴えをその時にしたのです。「神より偉大なことを期待し、神のために偉大なことを企てよ」

この訴えがもとでイギリス・バプテスト宣教会が組織されました。そして自ら宣教師となってインドのベンガルへ赴きました。１７９３年、彼が32歳の時でした。当時のことですから、生活程度に大きな差があったと想像されます。多くの困難との闘いの日々だったでしょう。また世界宣教に人々の関心の少ない時代ですから、サポートを得ることも難しく、厳しい経済的困難とも闘わねばならなかったのです。そのような中で持ち前の語学の才能が用いられ、ベンガル語で聖書を翻訳しました。そして他の人々の協力を得て、１７９９年にカルカッタの北にあるセランポールに印刷所を設けて聖書を印刷しました。

日本でも宣教師による影響、感化は広範囲に及んでいますが、カーレーを通しての影響も広範囲に及んでいます。キリスト教の宣教が第一目標ではありますが、翻訳事業、印刷事業、さらには１８０１年から１８３０年までカルカッタにある大学で東洋学を教えました。植物学にも通じており、植物学者として知られるだけでなく、セランポール植物園をも設立しています。

彼はまさに「近世海外宣教の父」と呼ばれるのにふさわしい人物だったと言えるでしょう。彼の感化を受けた人々が日本にも多くおられ、被宣教国日本からも多くの宣教師が海外に出かけていることは嬉しいことです。最近の傾向として、現地の人々に宣教すると言うよりは、海外にいる同胞、日本人に宣教しているケースが増えているように思います。ＪＣＦ（ジャパニーズ・クリスチャン・フェローシップ）と呼ばれているグループです。ここで言うジャパニーズには日本人と言うだけでなく、日本語という意味も含まれており、現地の日本語を学ぶ人々も宣教の対象になっています。

国内宣教と海外宣教は車の両輪のようなものです。どちらかを優先すると言うよりも、両方の活動が励まし合い、支え合って進められて行くものでしょう。

ヨーロッパからの宣教師派遣数が減少している現代、アジアの時代です。宣教師という立場では難しくても、日本からも次々と海外へ福音を携えて出て行く人々が与えられるようにと祈ります。今、海外で活躍している方々のためにも祈りましょう。

（姫井雅夫）

たゆまず種を蒔こう

三重県のトラクト配布を3年連続で実施した。今年は志摩町に出かけた。

昨年も奉仕者を送ってくださった韓国の多雲教会から7名が来日し、配布活動を積極的にしてくれた。上の写真は配布するトラクトに地元の志摩キリスト教会の牧師大杉常人師の挨拶文や反応はがき、子ども用のトラクトなどを折り込んでいるところ。女性は会員宅にホームステイ、男性は会堂に寝る。コンビニで朝食を買ってきて食べ、昼食は出先近くのコンビニを見つけて弁当、夕食は教会にもどる途中のレストランで。

7月11日、韓国からの奉仕者は中部国際空港に到着。そこで待ち受けていた私たちはレンタカーして志摩町に向かう。夕方、日が沈む頃志摩に入る。レストランで夕食をして教会に。さっそく、これからの日程の打ち合わせと作戦、祈祷、そして折込作業。

12日、早朝からデボーションをし、朝食、8時には教会(志摩波切)を出発。半島の西のはずれ（御座）から配布を始める。和具、布施田を配り、2日間で配布する予定の地域を1日で配り終えた。配布すると受け取り人払いで返送されて来ると言われている地域。反応はどうかなと心配していたが、次の朝、電話が掛かってきた。「だれの許可をもらって配っているのか」とのこと。大杉師が対応してくださった。その夜も折り込み作業。10時過ぎてやっと完了。

13日、同様に早朝のデボーションをし、朝食。会員の方が差し入れてくださった。8時に出発。片田をはじめ、地域一体の配布を完了。大杉師が伊勢神宮を見せてあげようと言われたが、残っているトラクトがまだまだあった。これを配り終えるまではどこも見に行きたくないと言う。韓国の奉仕者の熱意に感心。それではと鵜方や教会の周辺にも配布することにした。とにかくトラクトが全部無くなるまで配布した。韓国の多雲教会から特製のティッシュ・ペーパーも配布した。さらにキャンパス・クルセードが提供してくださった「ジーザス」のカセット・テープ、スポーツ・アトリーチ・ジャパンが提供してくださったゴルフの証し小冊子も配布した。地元の教会から大杉師と3名の兄姉が参加してくださった。

天気予報だと3日間は雨と言うことだった。しかし、主をほめたたえたいと思う。雨は帰途にほんのわずか降っただけだった。蒔かれた種は、きっとどこかで芽を出すに違いない。労された方々に主の豊かな報いがあるように。

（姫井雅夫）

●ご支援、感謝いたします。

今年も三重県にトラクト配布を実施しました。3年連続で行ないました。来年はEHCと相談して、島根県の松江市のそばにある3つの地域に配布しようと思っています。松江市内にある教会でご協力いただける教会を探そうとしています。関心のある教会はお申し出ください。

来年の5月を目指して、首都圏キリスト教大会の準備が進められています。

姫井が書いた個人伝道用トラクトが印刷されました。見本の欲しい方はぜひご一報ください

7月会計

収　入	321,734
活動費	74,575
ニュース印刷発送	39,968
部屋代	196,227
人件費	0
積　立	10,000
支出計	320,770
累　計	-202,249

2005年10月1日発行
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2－1
OCC、614号室
総　動　員　伝　道
03－3291－5035
03－3291－5266
Eメール　sodoin@ybb.ne.jp
ホームページ
http://www.gospeljapan.com/sodoin/
振替　00140－1－107255
代表　姫井　雅夫
編集　住吉　英治
定価　1部10円（送料別）
印刷　新生宣教団（2,500枚）